



SUPER GT 2018 REPORT

1号車「Keeper TOM'S」 第7戦で大逆転の今シーズン初優勝！ シリーズランキングトップで、決戦の地もてぎへ！

第5戦の富士スピードウェイでは1位「au TOM'S LC500」、2位「Keeper TOM'S LC500」の1、2フィニッシュと、TOM'Sの華麗な走りを見せつけた。しかし、続く第6戦で思わぬアクシデントが発生し、ポイントゲットはならず。しかし第7戦、予選5番手から大逆転で今シーズン初優勝。シリーズランキングも、14ポイント離されていたNSX100号車と同ポイントでトップになり、最終戦にて、2年連続シリーズチャンピオン獲得に挑む。



第5戦 富士スピードウェイ 8/4(土)・5(日)

1位「au TOM'S LC500」、 2位「Keeper TOM'S LC500」の1、2フィニッシュ 7ポイント差をつけて ランキング1位！



全般的に4番目のウェイトハンデを課せられている「Keeper TOM'S LC500」1号車であったが、15台中8台しか予選Q2へ進めないうち、エースの平川選手がスーパーラップで見事Q2進出を果たし、予選Q2ではキャシディ選手との懸命なタイムアタックで決勝を7番ワリッドからスタートすることとなった。

決勝がスタート。キャシディ選手はスタート直後に1台をパスし、6位に上がるとウェイトハンデを全く感じさせない走りであり、9周目には4位まで順位を上げる。その後5位との接戦を繰り返して、37周目に予選通りのビットイン。平川選手に交代し、再度コースイン。全車ビット終了後は5位のポジションにてレース再開、懸命なドライブを続け、67周目に前を行く「au TOM'S」36号車とのバトルを経て4位のポジションで走行を続ける。

76周目に2回目のビットイン、キャシディ選手に交代しレースを再開。3位までポジションを上げてコースに復帰したが前を行くウェイトハンデの少ない「au TOM'S」36号車とのバトルを経て4位のポジションで走行を続ける。

113周回時に3回目のビットイン、平川選手へと交替し4ステイメント目のコースへと送り出した。ウェイトハンデの少ないGTRマシンの後塵を拝していたが、タイヤの使い方等から徐々に後退してゆきこのステイメントで3位へと順位を上げることに成功！ 迎えた147周目、スタートから4時間近くになったところで、最後のビットストップに入ったKeeper TOM'S 1号車、今レースでは3回のビットインをミスなくマシンをコースへと送り出したメカニック、今回も安定したビット作業でコースへ復帰。3位のポジションで177周のゴールへと向かった。その後、トップを走るGTRにトラブルが発生し緊急ビットインを余儀なくされた影響で2位へと浮上し、1位「au TOM'S」2位Keeper TOM'S LC500よりTOMS 1-2体制である。

シリーズランキングも2位の「au TOM'S」に7ポイント差をつけてランキング1位へと上がり、残り3戦の勝負に挑む、目指すはV2！

第3戦 鈴鹿サーキット 5/19(土)・20(日)

3位表彰台を獲得！ シリーズランキングもLEXUS勢トップの3位へ浮上



予選、LEXUS勢でQ2に進出したのはTOM'Sの2台のみ。「Keeper TOM'S LC500」1号車は、今シーズン好調のNSX勢が上位5台を占めるなか、4番手に割って入り翌日の決勝をスタートすることとなった。

決勝、計測システムの不具合によってスタート時刻が40分程遅れるという波乱があったものの、システムは復旧しスタート進行は粛々と進められた。スタートドライバーのニック・キャシディ選手がスーパースタートを決め、第1コーナーで3位のNSXをアウト側からオーバーテイク！順位を3位に上げる。

2位のNSXに対してルーツノーズでプレッシャーをかけた。冷えたタイヤで抜群の速さを見せたが、タイヤが温まり予選での速さを取り戻したNSXとの差が徐々に開くものの、離されないように必死で食らい付いて行く。14周目に39号車のクラッシュによりセーフティカーが導入され、前後の間隔がリセットになった。2位のNSXとは差がなかったが、4位のNSXとの間に築いたギャップがなくなってしまう。

19周目にリスタートとなるが、そこでまたもやキャシディ選手が抜群のリスタートを見せ、第1コーナーで2位のNSX 100号車のジェンソン・バトン選手のイン側に飛び込みオーバーテイク！順位を2位に上げさらにトップを行くNSX 8号車を追う。25周目にルーティーンのビットイン、エースの平川選手へ託し、レースを再開。迅速なビットワークで2位をキープしたままコースへ復帰するが、先にタイヤ交換を済ませていた100号車に後方から迫られ、アウトラップのスプーンカーブで冷えたタイヤで必死に防御するも及ばず、順位を3位へと落としてしまう。その後、順位を上げることはできなかったが、見事今シーズン2回目の3位表彰台獲得！シリーズランキングも3位へ上げることに成功した。

第6戦 スポーツランド菅生 9/15(土)・16(日)

無念のクラッシュでポイント獲得ならず



第7戦 オートポリス 11/20(土)・21(日)

大逆転で今シーズン初優勝！！



予選は、通年以上に気温が高く、翌日のレースを見越して、固めのタイヤをチョイスしていたが、タイヤ特有の突然のスコールによって急激に気温と路面温度が下がり、最終的に上位には柔らかなめのドライタイヤをチョイスしたマシンが独占する結果となり、ウェイトハンデと燃料リストラクターのダブルハンディキャップがさらに足かせとなって、「Keeper TOM'S LC500」1号車は12番手からの決勝スタートとなってしまう。

第4戦 チャン・インターナショナル・サーキット 6/30(土)・7/1(日)

予選12位から挽回し、 貴重な3ポイントをゲット

キャシディ選手がスタートのステアリングを握り、ポジションをキープしたまま順調にスタート。スタートタイヤは予選で使ったタイヤを使用するレギュレーションとなっているため、固めのタイヤを慎重に温めながら周回を重ねる。ベースの上からライバルのマシンに前を塞がれ、なかなか自分のベースで走行ができないストレスの中、虎視眈々と前のマシンを追うキャシディ選手。9周目に11位、15周目に10位と徐々に順位を上げていく。23周回時にはライバルのクラッシュで9位につき、翌24周目には8位と確実に順位を上げていった。34周回時にルーティーンのビットイン。給油とタイヤ交換を終えて再スタートしようとしたところ、タイヤ交換が終わる前にエジャッキを下げてしまうというミスがありながらも、給油とタイヤ交換を終え、ドライバーをエースの平川選手へ交代してレースを再開した。ビットでのロスタイムもあり全マシンがビット作業を終了した時点で11位と順位を落としてしまうが、平川選手は諦めず前のマシンを追い続けた。最終的に順位を8位まで上げてレース終了、後半の平川選手のベースが良かっただけにビットでのロスタイムが悔やまれるが、貴重な3ポイントを獲得し、次戦の富士500マイルレースに挑む。



前戦の菅生にて圧倒的な強さを見せたNSX勢の勢いは衰えを見せず、予選上位を席巻する中、1号車「Keeper TOM'S LC500」は予選Q1を平川選手のスーパアタックで3位にてQ2進出、予選Q2もさらにギアを上げたNSX勢に割って入る5番手ポジションを獲得、NSX勢の中にTOMSの1号車と36号車が挟まれるようなポジションで決勝をスタートすることとなった。

ハンデを抱えた状況にも関わらず、スタートドライバーのニック・キャシディ選手は前を行くNSX勢に猛然とアタック、シリーズランキングトップのNSX100号車とスタート直後からデッドヒートを繰り返す。

キャシディ選手の見事なテクニクによって4位に浮上、前のNSXを追い続ける。20周回時にGTR300クラスのコースアウトによってセキユリドライバーが導入される。25周目にリスタート、再び前を行くNSX 8号車と17号車を追い続けるが、2台でのブロックは流石に容易には崩せず我慢の走行が続く。チームは、前を行く36号車と36号車と17号車の同時ビットインを敢行、完璧な作業で2台を送り出し、NSX勢の前に出る「実質TOMSの1-2体制にてレース後半に突入。平川選手は、36号車が若干ベースが落ちたタイミングを逃さずオーバーテイクに成功しトップへ浮上する。

その後36号車の追撃を受けるも、予選5番手から大逆転で今シーズン初優勝。シリーズランキングも14ポイント離されていたNSX100号車と同ポイントでトップになり、最終戦にて、2年連続シリーズチャンピオン獲得に挑む。